

社会心理学における パーソナリティー理論

——社会心理学史研究——

折橋 徹彦

一

人間の社会行動に関する研究には、あらゆる領域において関心がよせられている。⁽¹⁾これら社会行動の研究の心理学的基礎の一つとしてのパーソナリティー理論がある。パーソナリティーの問題は、古くから諸社会理論のなかで人間性の問題として扱われてきた。また、パーソナリティーに関する理論は社会心理学の基礎として研究されてきた。これらパーソナリティー諸理論をその発達の系譜をたどりながら研究することが本研究の中心課題である。

本稿においては、この研究の過程を私の修士論文「社会行動理論におけるパーソナリティー概念の位置」を中心として紹介し、さらに修士論文以後の展開の方向を検討する。

二

社会心理学におけるパーソナリティー理論の源流は、フロイ

ドと彼の後継者達の理論のうちにある。フロイト自身の理論は社会学、文化人類学の領域に適応されることによって次第に修正されてきた。文化及び社会がパーソナリティーの形成に大きな役割をはたすことが認識された。このことから、パーソナリティー理論を再構成しようとする試みが、アメリカを中心とする精神分析左派の人々によっておこなわれた。この傾向は一九三〇年代にあらわれはじめた。クララ・トンブソンは、この点を次のように述べている。「数人の分析者達は、比較文化の研究において文化人類学者及び社会学者との協力によって人間の彼の社会に対する関係についてより多く学びはじめた。この問題において、E・フロムは大きな業績をあげた。しかし、今日でさえ文化の研究に基盤をおいて人間の諸関係の科学を発達させることに興味を持つのは少数のグループにしかすぎない。」⁽²⁾

パーソナリティーの研究をこのように文化あるいは社会を基盤として研究した少数のグループにはカーディナー、フロム、サリヴァンがいた。彼等の理論を検討することによって、アメリカにおけるネオ、フロイディアンのパーソナリティー理論の概要を理解することができる。

フロイト左派のフロイト批判の共通点は、フロイトの生物学主義に対するものであった。この批判の基盤がいかなる理論的な修正によってなされたかをみてみよう。

カーディナーはパーソナリティー形成の問題を制度と個人の相互作用の問題としてとらえた。

彼は個人のパーソナリティー形成にとって重要な役割をはた

す制度を一次的制度(primary institution)と呼んだ。家族における人間関係、排泄及び性に関する禁、食物に関する規制などがこれらの制度である。個人は自己の生物的欲求とこれらの制度の中間に位置づけられる。カーディナーはこの点について、「諸制度とそれに直接接する適応装置である自我との関係に注目しなければならない」という。自我は「主観的に知覚された個人の適応装置の総体である」とされる。この自我が制度との関連において客観的に把握されたものが基本的パーソナリティである。カーディナーは未開社会の資料を基礎として、一次的制度がいかにして、この基本的パーソナリティに影響するかを分析する。彼は制度のうちで、神話、宗教、民間伝承などはこれら基本的パーソナリティから投射されたものであるとして、これらのパーソナリティへの影響については述べていない。

フロムは、カーディナーのこの点を批判し、パーソナリティ形成に対する社会的影響をより包括的に理解しようとした。フロムの理論の基礎には二つの基本的な欲求概念がある。「人間の生理的組織に根ざした諸欲求」を「自己保存の欲求」と呼ぶ。この欲求が一定の経済制度、社会制度における「労働」を媒介としてそれぞれのパーソナリティ特徴(personality traits)をつくりだす。生活条件に対する反作用によって形成されたパーソナリティに特徴づけられる衝動が社会的欲求である。

このように、社会的条件がパーソナリティ形成に影響する

という点では、フロムとカーディナーは類似しているが、フロムでは、人間のパーソナリティの問題を理解するための、基本的な欲求として、精神的な孤立を回避する欲求が前提とされる。人間は共同感と「帰属」感をあたえる社会的な行動様式と関係を結んでいることが精神的に不可欠である。他人との結びつきによってのみ、人間はその最も初期の段階において生存できたということも、この精神的孤立の回避を人間の基本的な欲求とする一つの原因となる。人間の自己意識の増大も孤独感を強くする。人間のパーソナリティの発達は個性化の過程であり、母親との絆からたちきられる過程でもある。ここに失われた絆にかわって積極的な連帯感を形成することが、パーソナリティ発達目的となると、フロムは云う。このような統一のパーソナリティの形成の過程に社会過程が作用し、その社会に特有なパーソナリティ構造を形成することになる。フロムはこれを社会的性格(social character)という。

フロムにおいても、また、カーディナーにおいてもパーソナリティ形成において社会的条件が重視される。ことに、これが対人関係の場を媒介として注意を向けている。

左派におけるフロイトの生物学主義、本能主義の批判が、このような社会的条件の重視という観点からなされてきたことは、クララ・トンプソンも述べている。しかし、この社会的要因は対人関係の問題を媒介させることによって一層大きな役割を果たす。

対人関係のパーソナリティ形成に与える影響については、ホ

ルナイも次のように述べている。「しかしながらこの環境的要因のうちで性格形成にもっとも関係してくるのは、子供がそのなかで成長するところの人間関係である。」この対人関係理論をパーソナリティー理論の基盤としたのがサリヴァンである。

サリヴァンは彼のパーソナリティー理論を次のように展開する。まず、幼児の生理的欲求から生じる緊張の解消ということが前提となる。また、幼児には「安全への欲求」(need for security)がある。幼児はしばしば母親を感じている不安を感じ(empathy)という作用で感じ自分も不安に陥る。不安は幼児に生理的欲求満足のための吸乳運動を放棄させる。すなわち、幼児は生存するために不安でない状況への回復の欲求をもつ。これが「安全への欲求」である。不安という作用は母と子の対人関係に作用し生理的欲求をコントロールする。

幼児のパーソナリティー形成の最初の段階は吸乳運動を通じて母親の人格化(personification)をはじめることである。母親の乳首は通常、幼児にとって生理的緊張を解消するものとして体験されている。しかし母親が不安を感じていると、幼児はこの乳首を不快なものとして体験する。この体験を通じて幼児は母親を人格化する。不安の状態にある母親は「悪い母親」(bad mother)として、また通常の状態では「よい母親」(good mother)として人格化される。これに続いて、幼児自身の身体的成熟が、彼自身の身体的器官の二つの部分を接触させる。すなわち、手を足や性器にもっていくことによって人格化を形成する。この場合においても、対人状況、とくに母親は、幼児

の行為を観察し、不安を感じることによって幼児を不安にさせる。この場合にも、先の場合にも、母親を不安にさせるのは、社会的規準に母親がはずれていると考えることによっておこるとされる。子供が性器に触れることは、社会的タブーであり、これをみた母親は不安を感じるわけである。幼児は不安によってその行為によって得る自己意識を放棄していく。このような過程を経て幼児のパーソナリティーは形成される。

サリヴァンはこのように対人関係、殊に母と子の対人関係を中心としてパーソナリティー形成を考える。社会環境は対人関係の媒介を通じてパーソナリティーに影響を与える。パーソナリティー発達のさらにすすんだ段階、児童期、少年期、青年期においてもこのような循環はくりかえされる。

対人関係の重視、またそのパーソナリティー理論への適応が、フロイト左派におけるパーソナリティーの理論をフロイトのそれから離れさせた一つの原因である。

さて、この対人関係の重要性という問題を考えるならば、この考え方の源泉を理解せねばならない。フロイトのパーソナリティー理論にも母と子そして父と子という対人関係の問題がある。サリヴァン、フロムが対人関係理論を基盤としてフロイト理論を修正したとすれば、そこにみられる対人関係理論の源泉はフロイトのそれと相異なる性質をもつはずである。G・H・ミード、J・M・ボールドウィンはフロイト左派に影響を与えているパーソナリティー理論を展開している。対人関係理論とパーソナリティーの問題を検討するために、まずボールドウィ

ンの理論から検討してみよう。

三

ボールドウィン⁽⁸⁾は人間のパーソナリティー⁽⁹⁾発達の基本的な形態を設定する。彼によれば、人間が自己意識を発達させる第一の段階は、個人が社会に適応するために社会的環境を無条件に受け入れる「投影的段階」(projective stage)であるとする。人間は身体的成熟と模倣によって外界のものを受け入れようと努力する。そのとき、模倣されたものを自分のものとして主観的に感じる「主観的段階」(subjective stage)に達する。更に、自己のものとして主観的になったものを、他の人々に投射する「放射的段階」(ejective stage)に達する。このパーソナリティー⁽⁹⁾発達の基本的な形態は次のようにも説明される。「私自身に関する私の感覚は貴方を模倣することによって成長し、そして貴方についての私の感覚は私自身に関する私の感覚に関連して発達する。」⁽⁹⁾ボールドウィンはこのような人間の成長を「人格的成長の弁証法」(Dialectic of Personal Growth)とよぶ。このパーソナリティー⁽⁹⁾の発達は対人的環境を中核として発達する。

即ち、人が自己意識を形成する際に彼が自分の属性として認識するものは、かつては、社会環境のうちに、みいだされたものである。それはかつて、他の人のパーソナリティーとよんだものである。このように一般的パーソナリティーは自己意識と他人に関する意識の両方からなりたつとされる。人間は本質的

に社会的なそして模倣的な性質を備えている。そうして彼をとりまく他の人のパーソナリティーの属性を自己に移入し、それがあたかも自分であるごとく行動しているうちに、彼はそれを自分の属性にする。

このような自己意識形成の過程を幼児のパーソナリティー⁽⁹⁾発達において観察したボールドウィンは、幼児は模倣によって社会的自己を形成すると云う。この場合における幼児の模倣は選択性がない。彼は社会に適応するために、年上の者から与えられるものを隷従的に模倣する。この段階が幼児にみられる投影的な段階である。そうして、これを自己の属性として意識した子供は、その属性をこんどは攻撃的に自分より年下の妹や弟に行使する。この段階が放射的段階である。

子供は、この発達の循環をつきやぶる。それは、子供が模倣すべき他者に変化があらわれたときにおこる。子供が模倣している、子供のパーソナリティーの一部に形成する他者としての父親に関する考えが変化すれば、当然そこで、他者についての考えの反映である自己についての考えも変化する。子供のパーソナリティーが発達の循環をやぶって上昇するためには、他者からの示唆による自己に関する考えの変化が必要である。

子供のパーソナリティーの発達がおこなわれる環境は基本的には家族集団である。家族集団のなかで示唆によっておこなわれる教育はパーソナリティーの発達に基本的なものである。そうして、子供が成長するにしたがって参加する、よりひろがりをもつ社会環境、幼稚園、学校などにおいても、家族のなかで

おこなわれたと同じ形態のパーソナリティーの発達がおこなわれる。

さて、ここにおいて、パーソナリティーの形成にともなう社会的自己の発達とともに、倫理的自己 (ethical self) がどのように発達するかを考察しよう。ボールドウィンにおいては社会的自己と倫理的自己の区別はあまり明確ではない。より道德的規準の問題との関連においてとらえられるのが倫理的自己とよばれる。子供は社会に適応するために、社会、すなわち彼にとつては權威的立場にある人々によって、示唆されることによって、あるいは罰せられることによって服従を要求される。これによって、子供は自分の衝動あるいは欲望が、他人の意志によってある程度以上は禁止されることを知る。そういう制限を受ける自己を見いだす。このような自己に対して他者は自己とはまったく異なった、調和のとれた体系的にまとまったパーソナリティーとみなされる。子供は、この段階において自己を制限している權威や法を直接には理解できないので、「投影的」なものであるとして、他者にコピーされている權威や法を模倣する。人間はこのようにして移し入れたものを土台として道德的倫理を自己の意識とする。ボールドウィンはこの過程を通じて、抽象的な社会的規準が具体的な対人関係を通じて子供に働きかけていることを説明する。子供にとっては、父親、母親、あるいは乳母が社会的法律の最初の具現者としてあらわれ、彼等に服従し模倣することによって、自己の倫理的規準を設定するのである。しかし子供の倫理的意識がさらに高い段階に達するため

に、他者と自己の間の循環を破らなければならない。新しい倫理的規準を受け入れていくことによって、それまでのより個人的な、低い規準を放棄していかなければならない。

この倫理的自己をも含めた社会的自己は、社会環境のもとで発達する。しかし、その土台となるものは、それまで獲得してきた行為様式である。過去に学習したものと及び人間の生得的な反射や本能がその土台となる。これらのものは個人にとって私的なものだから、これを「私的關係」(private reference)という。彼は、より高い段階に達するためには社会生活の「コピー」を吸収しなければならない。

ボールドウィンのパーソナリティー理論の基本的な部分は以上のようなものである。フロイトの人間関係に関する理論が人間の本能的な発達過程の反映であるのに対して、ボールドウィンにおいては人間関係はパーソナリティーの社会的発達の基本的形態をささえる理論的前提として理解されている。即ち、それはパーソナリティー発達の過程には常に、他者と自己の相互作用があることをしめしている。このようにミード、ボールドウィンのパーソナリティー理論を検討することによって、左派理論への系譜の問題とともに、更に今日の社会行動研究がもつ心理学的側面をより正確にする手がかりを得ることができるかもしれない。

この先、問題をさらに深くアメリカ社会心理学史におけるパーソナリティー理論の系譜のなかに探ぐりながら展開していかなければならない。

- (1) なるべき社会秩序を導くには、社会秩序のシステム・マン (H. Lasswell) の中心とした社会秩序を導くべきである。 *Psychopathology and Politics*, 1930. : *Power and Personality*, 1948.
- (2) S. Freud, *Massenpsychologie und Ich-Analyse*, 1921.
- (3) C. Thompson, *Psychoanalysis-Evolution and Development*, 1950, p. 195.
- (4) A. Kardiner, *Individual and his Society: The Psychodynamics of Primitive Social Organization*, 1931, p. 19.
- (5) E. Fromm, *The Fear of Freedom*, 1942, p. 13.
- (6) K. Horney, *The New Ways of Psychoanalysis*, 1939, p. 78.
- (7) カール・マンのパーソナリティー理論は次の文献を参照せよ。
- H. S. Sullivan, *The Interpersonal Theory of Psychiatry*, 1953.
- H. S. Sullivan, *Conceptions of Modern Psychiatry*, 1940.
- E. Beaglehole, *Interpersonal Theory and Social Psychology*, pp. 50-79, (in) *A Study of Interpersonal Relations*, (ed.) by P. Mullanby.
- (8) ホール・ムラウインに関する紹介は、
今田恵『心理学史』一九六二、一三五〜一三六頁。
南 博『体系社会心理学』一九五七、一三七頁。
A. A. Roback, *History of American Psychology*, 1951.
こので論じたホール・ムラウインのパーソナリティー理論は、主として左の文献による。
- J. M. Baldwin, *Social and Ethical Interpretations in Mental Development*, 1897.
- (9) *Social and Ethical Interpretations in Mental Development*, p. 18.

(一橋大学大学院学生)